様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：１２４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７３０２０４

研究課題名（和文）労働証券論の史的展開：労働評価の格差是正、協同性の回復、国際的波及過程

研究課題名（英文）Historical Development on the Theory of Labour Note: Labour Evaluation Gap Correction, Recovery of Mutual Relationship, International Spread Process.

研究代表者
結城　剛志（YUKI, Tsuyoshi）

埼玉大学・経済学部・准教授

研究者番号：４０５５２８２３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,500,000円、（間接経費）　450,000円

研究成果の概要（和文）：労働証券論とは、労働評価の格差是正と地域コミュニティにおける協同性の回復を目指し、安定市場の構築を求める貨幣・信用制度改革論である。19世紀初頭の英国で誕生し合衆国や西ヨーロッパへと国際的に波及した。本研究は一次史料の精査を通じてこの波及過程を明らかにしている。労働証券論は、単一の学説ではなく、各国各地域に受容される過程で証券が有する機能や意味を変容させてきた。そして、労働証券をめぐる論争を通じて貨幣と市場の理解を深めていったことが分かったのである。
学術単著『労働証券論の歴史的位相：貨幣と市場をめぐるヴィジョン』（日本評論社、2013年）が参照されるならば本研究のあらましが理解されるだろう。

研究成果の概要（英文）：The theory of Labour note is a doctrine of money and credit reform which claims to correct labour evaluation gap, recover mutual relationship in regional community, and re-construct stable market economy. This theory occurred in the UK at the beginning of 19th century, and then spread over western European countries and the USA. This study clarifies the spreading processes via examining original materials. Labour note has changed its functions and significances in the processes of accepting in each countries and regions. Moreover, we found that the theory deepened its understandings of money and market through the debate of this theory.
To understand in detail, an outcome of this study should be referred. YUKI, T., (2013) Historical Phases of the Theory of Labour Note: some Visions on Money and Market (in Japanese), Nippon Hyoron Sha.

研究分野：経済学

科研費の分科・細目：経済学説・経済思想

キーワード：労働証券　貨幣・信用制度改革論史　労働貨幣　地域通貨　人民銀行　リカードウ派社会主義　ユートピア社会主義　アナーキズム

１．研究開始当初の背景

研究代表者は、貨幣・信用制度改革を通じて労働評価の格差是正と地域コミュニティにおける協同性の回復を目指した労働証券論の史的展開を考究する。第 1 に、19 世紀初頭のイギリスで誕生した労働証券論はアメリカや西ヨーロッパへと国際的に波及した。その波及過程を分析することで、労働証券論の有する機能・意義と限界を抽出する。第 2 に、労働の公平な交換というアイディアが、市場の不安定性や格差の拡大といった現代的な様相を背景にして再注目されている。時代を超えて再訪する労働証券論の生命力の源泉を探り、1980 年代以降の地域通貨論や「同一価値労働・同一賃金」、そして、協同的な人間関係の構築といった現代に通ずる射程を摘出する。

２．研究の目的

現代の日本社会が抱える諸問題には、様々な領域における格差の拡大や不安定就業、人間関係の稀薄化や地域コミュニティの機能不全、そして実体経済から乖離した金融肥大化などがある。イギリスの産業革命期（とりわけ 19 世紀初頭から中葉にかけての時期）に、ニューラナーク紡績工場（英）の工場経営者であるロバート・オウエン(Owen, R.)は、労働評価の格差是正、地域コミュニティの協同性回復、安定的な市場の再構築という目的のためには、貨幣・信用制度を改革しなければならないという特異な議論「労働証券論」(Theory of Labour Note)を展開した。

オウエンの報告書 *Report to the Country Lanark* (1821) は労働証券論の体系的な論述としては最初期のものである。その中で、コミュニティの構成員が生産・提供した物財・サービスの評価を投下労働量で測定することで、公平な労働量交換と協同的な人間関係の構築を目指すという構想を発表している。この労働証券の構想は、オウエン自身によって繰り返し挑戦されたばかりではなく、同時代人へと大きな影響を与え、アメリカや西ヨーロッパへとグローバルに波及した。さらには、1980 年代以降の地域通貨の歴史的源泉の一つであると理解され、時代を超えた生命力を示している。労働証券論史の包括的研究から、労働評価の格差是正と協同性の回復という観点においていくつかの現代的示唆を引き出すことができるのではないだろうか。

とはいえ、オウエンをはじめとする労働証券論者の言説は 20 世紀のマルクス主義的言説の陰となりほとんど顧みられることがなかった。だが、長い空白期間を経て今日では以下の 4 点の理由で労働証券論者の言説が国内外の研究者の関心を集めている。

第 1 に、社会主義のソ連型モデルの倒壊によって、それまでの歴史の陰に隠れていたマルクス以前からの社会主義思想を見直そうという気運が高まったことを指摘できる。この方向性に沿って、ソ連型社会主義では忘れられがちであった、社会主義本来の精神に立ち戻ろうという研究動向がある。この文脈では、なぜ長い期間、労働証券論が歴史の陰に隠蔽されていたのか学説史的に精査されなければならない。

第 2 に、労働証券論者の再評価の試みとして、複数の伝記的研究が発表されている。これらは労働証券論の歴史的背景を理解するための補助的文献として活用できよう。

第 3 に、今日、投機的な相場に攪乱された市場価格による物財やサービスの評価が必ずしも市場参加者間の公平性を確保しないという認識が生まれつつある。そこで、人間社会の生活基盤に労働を位置づけ、価格とは異なる評価基準（労働時間）を対置することで、労働や実体経済に依拠した公平な経済社会を模索しようとする研究動向がある。

第 4 に、地域社会の人間関係の稀薄化が指摘される現代社会の様相にたいして、コミュニティにおける協同性の回復・再生手段としても労働証券が注目されている。たとえば、現代アメリカのタイムダラーと呼ばれる地域通貨では労働時間を基準として公平交換が行われている。しかし、労働証券が現代地域通貨へと与えた影響と先駆性が、若干の研究者の間で気づかれつつも、その内実が十分豊富化されたとはいえない状況にある。

以上のような労働証券論やオウエン思想に関する注目の高まりを指摘できる。にもかかわらず、労働証券論の体系的な研究が国内外でほとんどみられない。その背景には、マルクス学説に帰着するような先行研究の傾向や人物研究に特化しがちな研究手法があったのではないか。労働証券の理論・思想・実践に関する＜包括的・歴史内在的な理解＞及び＜現代的視点からの評価＞のためには、資料・文献の調査・分析、公平性の実現及び協同性の回復という目的に即した機能と問題点の抽出、国際的波及過程の研究を行い、労働証券論の史的展開を明らかにする必要がある。

３．研究の方法

労働証券論は、イギリスのオウエンから同国のトンプソン(Thompson, W.)やペア(Pare, W.)へ、そしてフランスのプルードン(Proudhon, P.J.)、アメリカのウォレン(Warren, J.)へと次々と波及し、国際的な広がりを見せた学説・実践である。そして、20 世紀に入ると、プルードン理論の継承を自認するドイツのゲゼル(Gesell, S.)、1980 年代以降の地域通貨へと伝播していく。したがって、上にあげた代表的論者の文献を丹念に読み解くことで各論者の「労働証券の理論・思想・実践」を明らかするという基礎作業を積み重ね、それぞれの学説の継承関係や波及過程を詳らかにしなければならない。とりわけ、

ウォレンの文献はこれまでほとんど参照・研究されることがなかったが、研究代表者は既に 2 本の関連論文を発表している。さらに、Caldwell, B.A.(Ball State University)の博士論文 *Josiah Warren and the Sovereignty of the Individual, Journal of Libertarian Studies*, 1980. によって、ウォレンの手稿が Workingmen's Institute Library (Indiana, USA)に保存されていることが指摘されており、手稿の収集と解析により研究を一層充実させることが期待される。また、労働証券を実践的に支えていたのは、イギリスの協同組合・労働組合である。これらの団体が発行した機関誌等々の一次資料を関連施設で収集・読解する。重要文献の収集と丹念な資料読解は、先行研究の批判的な労働証券評価に留保を付す慎重な作業でなければならないだろう。このようなアプローチを通じて、国際的な広がりを見せた労働証券論の機能・意義と限界を明らかにすることができるのではないか。

４．研究成果

本研究の成果は、学術単著『労働証券論の歴史的位相：貨幣と市場をめぐるヴィジョン』（日本評論社、2013 年）に端的に示されている。なお、本書刊行に際して、日本学術振興会研究成果公開促進費（学術図書）、平成 24 年度、課題番号 245164 の補助を受けることができた。

労働証券論とは、貨幣・信用制度改革を通じて、労働を基準とした公平で望ましい市場経済の構築を目指す理論・思想・実践に関わる学説である。本書は、マルクス、プルードン、オウエン、ウォレン、ペア、グレイ、ゲゼルの各学説を整理し、マルクスによって「労働貨幣論」としてやや単純に把握されていた学説を多層的に切り分けることで、労働証券論の歴史を約一世紀（1820 年代～1920 年代）にわたる包括的な論争史として再構築している。

本書の意義は以下の諸点にある。第 1 に、マルクスによる「労働貨幣論」という規定を再考し、従来の分析枠組みでは捉えきれなかった労働証券論の内在的理解を促し、市場社会主義、反市場の社会主義、地域通貨という労働証券論の多面性と、それが内包する市場と共同体、単純・複雑労働、貨幣論と信用（証券）論の相克といった多様な論点の把握を可能にしている。第 2 に、本論争がたんなる政策論争ではなく貨幣と市場に関する理論的認識の深化に貢献してきたことを解明している。第 3 に、これまでほとんど詳説されることのなかった英米の事例研究を行うことで、労働証券論の実践上の諸課題を摘出しつつ、英米の交流関係を浮き上がらせている。第 4 に、労働証券論が包含する現代の地域通貨論を先取りするような先見的で広範な知見を摘出している。

本書の作業を通じて、先行研究では支配的であったマルクスの知見に基づく解釈の妥当性が問い直され、かつ、一次史料調査に裏付けられた丹念な研究によって、各論者の歴史的位相と国際的な波及・応答過程が明らかにされている。このような労働証券論に関する通史的・包括的理解を提示した研究は国内外を見渡してみても提出されたことがなく、本書がもたらす知的成果は国際的な水準に達しているといえよう。

本研究の特色は、第１に、労働評価の格差是正と協同性の回復という＜現代的視点＞と、労働証券論の史的展開・国際的波及過程という＜歴史内在的視点＞を併存・交叉させているところにある。研究代表者の一貫した研究とその蓄積を踏まえ、海外の一次資料調査に裏付けられた丹念な研究は、労働証券論に関するこれまでにない包括的な理解を提示することができよう。第 2 に、経済学・経済学史（とりわけ、マルクスの『剰余価値学説史』に集約されるような先行研究）においては十分包摂することができなかった「地域的に流通する通貨」（労働証券）の特異性を指摘した。この作業を通じて、経済学が対象としている理論的世界の範囲や境界も示唆されたといえよう。第 3 に、労働証券論は「同一価値労働・同一賃金」に通じるような人間の同等性を志向する理念と、人々の結びつきや協力関係を制度的に補完する必要性を看取していたという 2 点の先駆性を指摘し、その上で、現代の地域通貨との関連性や不連続性を明らかにした。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

１．結城剛志「信用貨幣論と表券貨幣論に関する断章」『社会科学論集』（埼玉大学）、139 号、2013 年、117–29 頁、査読なし

２．結城剛志「背理の先に何があるのか：反資本主義、労働証券、労働者自主管理」『季刊･経済理論』第 49 巻第 3 号、2012 年、39–51 頁、査読あり

〔学会発表〕（計６件）

１．結城剛志「異端の貨幣・信用制度改革論史：労働証券と地域通貨」『経済思想史研究会』（東北大学）、2013 年 8 月 8 日

２．結城剛志「『労働証券論の歴史的位相』をめぐって：市場社会主義論の系譜」『マルクス理論研究会』（専修大学）、2013 年 6 月 29 日

３．結城剛志「貨幣と非貨幣の間」『政治経済学ワークショップ』（東京大学）、2013 年 3 月 23 日

４．結城剛志「国際協同組合年と自主管理型市場社会主義論」『マルクス理論研究会』（専修大学）、2012 年 10 月 27 日

５．結城剛志「スウェーデンの協同組合の反独占運動」『ロバアト・オウエン協会研究集

会』（生協総合研究所）、2012 年 9 月 15 日

〔図書〕（計１件）
1.結城剛志『労働証券論の歴史的位相：貨幣と市場をめぐるヴィジョン』日本評論社、2013 年、284 頁

〔その他〕（計１件）
1. YUKI, T. Proudhon's Socialism and Marx's Market Theory: The Theory of Free Credit and the Theory of Value Form, *The Uno Newsletter: Rejuvenating Marxian Economics through Uno Theory*, Working Paper Series 2–13–4, 2013. [Non-peer reviewed].

６．研究組織
(1)研究代表者
結城　剛志（YUKI，Tsuyoshi）
埼玉大学・経済学部・准教授

研究者番号：４０５５２８２３